銃後の職場において体験した戦争

奥山四郎（飯山満町・74歳）

一、軍国主義時代の日本

私は昭和十二年、二十二歳で警視庁の警察学校を卒業して、西神田警察署勤務となった。この年の七月に日支事変が勃発し、その前年には二・二六事件があり、日本は軍国主義の時代であった。日本が軍国主義になった事情を考えてみると、日清日露戦争で勝利を収め世界の三等国から一等国となり、国威が発揚された。富国強兵の政策で国力が増すに従い、朝鮮を併合し第一次世界大戦に参加して権益を得、それから満州事変を起し満州国を建設した。ついで日支事変を起したが、当時アジアの大部分は欧米諸国の植民地となっており、この日本の海外進出は列国の権益との摩擦となって指弾を受けるようになり、国際連盟を脱退し世界から孤立した。

二、太平洋戦争に突入

太平洋戦争の始まる時、日本は日支事変の勃発から四年を経過していたが、日本の海外政策は列国から敵視されるようになり、米英等から経済封鎖を断行された。日本は事態の好転につとめたが効を奏せず、このままでは戦争に負けた状態になるとして、米英に対し宣戦の布告をするに至った。この戦争の指導者の大方はこの戦争に勝利を得るとの公算は余りなかったようである。聞こえたことは、二、三年はよく戦ってみせるがその先は分らないとか、日本は神国であり神風が吹くとか、米国を占領することはできないが、太平洋に一線を引いてそれより以西は日本の勢力圏として維持しておいて話し会う。アメリカ兵は、日本兵のように勇気がないとか、アメリカは女権が強い国であり夫や子どもを戦争に出すことに反対して、世論を興すなどである。

私は成人してから専検の資格をとるため、世界地理、歴史など勉強したので、アメリカの各種資源の豊富さ、工業の発達など日本とは想像以上の開きがあることが分った。また勇気などのことにしても、日本人は比較的勇気があるということで、これは西洋史に見られる宗教・民族・独立戦争などから推察できる。これらのことにより、私はこの戦争には勝味がないと判断していた。

国では国家総動員法が発令されて、言論、物資も統制されて、一億の民が一つの心となって戦争を勝ち抜くためにつとめよ、と号令され戦争に負けるなどと戦争遂行に反することを言えば、戦時特別法で憲兵に逮捕され、敗戦主義者・国賊の汚名を着せられた。また全体主義の思想が唱道されて、個人は全体（国家）のためにあるということが強調された。この戦いがはじまるや日本は東南アジア方面において目覚しい戦果を挙げたが、この時この戦争は勝つものとして国民大衆は勝った、勝った、と歓喜したが、アメリカの力がまだ及んでいない地域で戦果を挙げても当然のことで、大き

な戦力がアメリカ本国にあることを日本の国民大衆は知らなかった。

わが連合艦隊は南方で戦い、相当の戦果を挙げたが、アメリカ軍の優勢補給物資の増大、新兵器の開発（例えば電波探知機の出現）により、日本が世界に誇るといわれた潜水艦は、いち早く米軍に発見されて機能を発揮する前に撃沈されたという。また、わが南洋の島々は沈むことのない航空母艦だ、と言った海軍の将軍もいたが、兵器の発達、戦術の進歩によって次々と玉砕し、サイパン、硫黄島沖縄も占領されて日本の敗色は濃くなっていった。

三、日本本土の空襲

昭和十九年十月頃からサイパンを基地としたB29が飛来するようになり、日本の都市や軍事工場を爆撃しはじめたが、焼夷弾で東京の神田がはじめて大きく焼けたのは十二月であった。私はこのころは巡査部長となって、住所のある板橋警察署勤務となっていた。

昭和二十年になるとB29が十数機の編隊で飛来したが、連日来るというのではなく準備を要するといわれ一週間位の間隔があった。

B29が銀翼を輝かせて飛来してくると、高射砲陣地からは高射砲が撃ち出されたが、飛行機の高度が高いためか当ることは少なかった。B29が墜落するのを見たのは通じて二機だけである。池袋に墜落されたB29には十一名乗っており、全員死亡とのことであった。

B29の編隊が来はじめのころ、日本の飛行機が体当りのためか編隊目がけて突進してゆくと、途中で日本機は火を吹いて墜落していった。これはB29から集中攻撃を受けるためと思われたが、あとではこのような状況は見られなかった。無益のことが分ったためであろう。

四、三月十日の空襲について

この日、日が暮れてから空襲警報が発令された。空襲警報は普通サイレンが鳴り、ラジオは敵のB29の編隊どこそこを北上中と放送された。当時板橋区には警察署は一署だけ（今は三署）であった。警報が発令されると自宅にいる非番員も全部出勤することになっており、署員を方面別に分けて警戒配置につかせた。

私は志村へ配置になったが、ここは東京の北部で埼玉県と境する場所であり、地形上から埼玉はよく見えるが、都心部は全く見えない場所である。当夜は闇の夜で敵機は見えず、強い風が吹いていた。午前二時頃警報が解除となり本署に引き揚げたが、当時は警察には乗用車一台と小型貨物一台であり、部隊は自転車で行動した。私の家は常盤台にあり、家に用事があったので帰る途中、少し廻り道をして家に寄り、一〇〇米くらい行ったところに、東京都心がよく見渡せる場所があり、ここで驚いたことに十粁以上離れた都心部が東の端から西の端まで見える限り一直線に切れ目なく真っ赤に燃えており、ああ、これが日本の滅びる姿かと嘆息し、ローマのスキピオがカルタゴを攻めてカルタゴが大火災となったとき、スキピオは「バビロニヤ、アッシリヤ、フエニキヤと次々に滅び、今またカルタゴ火焔の中にあり、次に滅びんものはそれローマか」と口ずさんだことが伝えられているが、私もこれになぞらえ、国の興亡を思い「東京火焔の中にあり、次に滅びんものは？」と心で唱えたものである。当時新聞、ラジオでは日本の被害は発表しなかったが、この被害は新聞に「江東方面に焼夷弾を落され、被害が発生した」とだけ出ていたのを覚えている。私が火焔を見た限りでは江東方面だけでなく、他の部分も大きく焼けている筈である。当時の新聞は今の一枚の新聞の半分であった。当時ラジオは戦意高揚のため

勇しい音楽を鳴し「いざ来いニミッツ、マッカーサー来てみりゃ地獄へ逆落し」などと放送したが、低級な響きに聞えた。その日の夜が明けて、夕方になった時、二人の中年の婦人が警察署の前の中仙道を埼玉の方へ歩いており、火焔の中をくぐってきたとのことで顔が真っ黒であり、昨夜から歩きつづけているとのことであった。

その翌々日は、板橋警察署から上野駅へ被災者帰郷の警戒整理をするよう出動の指令があり出動したが、上野駅の前面平地は見える限り焼野と化し、火熱で溶けたのか焼けた残骸もなく金庫だけが点々と残っているだけであった。罹災者は行き先別に焼け跡に四列に並べて、汽車の行き先に応じホームへ引率して乗車させることを夜まで続けた。昼ころ上野の山へ警察官がトラックに死体を一ぱい積んで運んでゆくのが見えたので、私はひとりその方向にいったところ、木立ちの中に幅三メートル位の道路があり、この道路の両側にズボンを穿いたまま主に若い男の死体が、両側共に足の方を道路に向けて、何百人か仰向けに伏せてあり、これは通行しながらその人相が分るようにとの配慮と思われた。私はひとりこの死体の中にはいり込んで、この人達はほんとうに死んでいるのかと思ったり、私がひとり生きているのはおかしいではないかと思ったりしながら、なお先へ進んだが、この人達は火焔に追われて逃げ場がなくなり、川に飛び込んだ人達であろう。三月の気温では、水の中には二十分とは生きていることはできないはずである。

ついで広場へ出たが、ここには手・足・頭は同じように焼け失せて、胴体だけの何百の死体が高く積み上げられていた。なぜ積み上げられるのかと思われるが、これはトラックから降ろす際、死体の上へ降ろすのが作業が容易であり、またその後の作業も考えてのことであると思った。警察官も、焼けただれた重い死体を、一日中トラックに積んだり降したりするのはご苦労な作業と思った。この死体はその場へ大きい穴を堀り埋めるとのことであった。

この場所には、死体運搬の警察官や死体を探しにきた人など、数名の人がいたが、この場所にも焼けてない死体は一ぱい伏せられてあった。私の目の前に、若い母親が一歳位のこどもを抱くようにしていた死体があったが、そこへ夫と認められる背広姿の人がきて、母親の手の中にあるこどもの両脇へ手を入れて、そのまま高々と差し上げその顔を見つめ、涙を拭いていたが、死ぬも生きるも悲惨の極みと思った。この方は、防空壕で亡くなったのではないであろうか。

五、わが警察署管内の被害について

空襲は東京の中心部を焼き払い、次第に残っている方の郊外の方へと移っていった。板橋には軍の施設や軍事工場があり、爆弾や焼夷弾を落されるようになった。私は夜、焼夷弾で家が焼けているところへ行ったが、風もなく火勢も弱く延焼を防げばできると思ったが、全く人影は見えなかった。焼け死なないためには、まず安全な場所へ逃げることの意識だけとなったようである。

私の家の近くへも雲の厚い朝敵機の編隊から一斉に何十発の爆弾を投下され、一瞬にして一八〇名の人が命を落したが、この時私の家も爆風で被害にあった。この時の死体は壊れた家の木を集めて、その場で骨にする人が多かった。私はこれらの死体を処理しながら、次は自分が処理される番かと思ったものである。

大自然には麗かな太陽の光が輝き、木々は若芽を吹いて微風にそよいであり、鳥のさえずりさえ聞えるのに。人間は毎日殺し合いを演じている。

一度きり生れてこないこの世に、殺し合いをして誰がどうなるというのか、地球上の人間もみんな高が知れている者共だ、誰か偉大な人物が現れて、この戦争を止めさせることはできないのか。普通の人が平和のため立ち上がれば葬られてしまう。この発言ができるのは誰か、ローマ法王か、など嘆息したことがある。

六、終　戦

家は焼かれ食糧はなくなり、米軍は日本の近海まで押し寄せており、ソ連の参戦、原子爆弾の投下、三発目は東京と予測されているが、日本は一度も敵に負けたことのないのを誇りとしており、捕虜になった場合は自決しろと教えられてきた国柄であり、自ら降伏するということは考えられない。本土決戦で潔く国と運命を共にするのだと覚悟を決めていた。署へ出勤してから、今日、天皇陛下のラジオ放送があることを聞かされたとき、同僚のひとりが「朕と共に死んでくれ」とのことだろうと言ったが、私も全くその通りと予想した。やがて警察の広い事務所で二十名ぐらいの者が集って放送を聞いたところ、ポツダム宣言を受諾するとのことが聞えたとき、ああこの戦争は終った。死ぬものと思っていたのが死なないで済んだ、という嬉しさで胸が開かれる思いがした。放送が終って誰ひとり声を出す者がなく、みんな自席へ戻ったが萬感交々であったろう。私はこの時二十九歳、家には妻もおり翌年にはこどもも生れ、また赤坂警察署に転勤となり、マッカーサー官邸の警備員となったが、これから占領下の警察のつとめがはじまることになる。

終り

十月三十一日